

< 質問事項の回答 >

前回の会合で、他の委員より下記の4項目についてご質問がございましたので、当会より回答申し上げます。

2005年1月7日
(財)日本釣振興会

(1) バスフィッシング人口300万人及び市場規模1,000億円の根拠について

小グループ委員の方より「バス愛好者が300万人、経済効果が1,000億円というその根拠を示して欲しい」というご質問がありましたので、お答えいたします。また、併せて5年間でバス釣り人及び売上げが半減した状況と、その要因について資料を付記し、記述させていただきます。

この別資料(1~2)は、(社団法人)日本釣用品工業会と矢野経済研究所が共同で、2年に1度調査し、報告をされている「釣用品の国内需要動向調査報告書」から抜粋したものです。1998年から2003年までの5年間の釣り用品釣り種別出荷金額他ですが、これは釣り用品の大半の製造メーカーの出荷額を合計し算出しておりますので、極めて信憑性の高い指標であると思われれます。次回の調査報告は、本年の1月中旬に出されますが、調査を始めて20年、丁度10回目の調査報告になります。

この資料は、毎回、(社)日本釣用品工業会より通産省(現・経済産業省)に提出し、詳しく報告をしております。

1. バス愛好者が300万人、経済効果が1,000億円と言われる根拠は、
まず2002年の釣り用品全体の製造メーカーからの年間出荷金額から算定すると
- | | |
|---------------------|----------------|
| 釣り用品の小売市場規模は | 2,246億円 |
|---------------------|----------------|
- その中の釣り種別のルアーフィッシング釣り種別の構成比は **28.9%**
ルアーフィッシング用品の小売販売総額は **649億940万円**
と推定されます。

2002年度の釣人口は、レジャー白書(資料3)によると1670万人です。
ルアーフィッシング人口は、単純に一人当たりの年間買上金額が同一とすると

$$1,670 \text{万人} \times 0.289 = 482 \text{万}6,300 \text{人}$$

(社)日釣工主要関係者の報告によると、1997年当時はルアーフィッシング人口構成比の約90%がバス釣りによるものとされていましたが、5~6年前よりルアーフィッシングの中でバス釣りが大幅に減少し、海でのソルトウォーター、ジギングやシーバス(スズキ)、ロックフィッシュ(カサゴ・メバル)釣りなど

が増加しているなどの理由から、現在では70%近くまでその構成比は急落しています。

バス釣り人口は $482万6,300 \times 0.7 = 337万8,410人$

従って、2002年時点でのバス釣り人口は、単純計算で337万人となります。しかし、実際は、鮎釣りや船・磯釣りは、竿や電動リール等が高額な為、バス釣りに比較して、一人当たりの年間購入金額が約1.5～3倍になります。バスフィッシングは、一般的に子供さんから30代ぐらいまでの青少年が主流を占め、近隣の場所で釣りをする事が多いので、道具も必然的に手軽で格安なものになります。

それらを考慮すると、製造メーカーからの出荷金額を、一人当たりの年間買上げ金額から逆算すると、この数字より20～30%多いバス釣り人口が想定されております。当会では、そのような事から実質的なバス釣り人口(2002年当時)は400～450万人と推定しております。但し、現在では更に10%以上減少していると思っています。

次に、バスフィッシングの経済効果1,000億円の根拠ですが、

2002年のバス用品小売販売総額は前述の通り

$$\dots 649億 940万 \times 70\% = 454億3,658万円$$

これは、このバス釣り用品のみの金額で、用品以外のボート業やバスガイド業、漁業組合の年間入漁料、1艇が数百万のバスボートや駐艇場、バス釣り雑誌、全国各地での1,000近い釣り大会の賞品や開催費用など直接的効果の他、釣り人が利用するコンビニエンスストア、ガソリンスタンド、飲食店、民宿・旅館等、駐車場や公共交通機関、高速道路などの交通費等など、間接的なものを加えるとバスフィッシングによる経済効果は多岐に亘り、総計すると1,000億円を遥かに超えると考えられます。

因みに、米国での釣り人口は5,300万人、釣りによる経済効果は2002年で約5兆円(415億ドル)、バスフィッシングの人口は1,500万人、経済効果は、1兆2,000億円と報告されております。

ただ、ルアーフィッシング用品の売上自体も、1998年当時と比較して、2002年には49.5%と半減しています。釣り種別でも最も大きな落ち込みになっていますし、バス用品に限定すれば、前述の通り更にその落ち込みは大きく、約5年間で3分の1近くになっています。

1998年のバス用品小売販売総額

$$\dots 1,291億7,184万 \times 90\% = 1,162億5,465万円$$

2002年のバス用品小売販売総額は前述の通り

$$\dots 649億 940万 \times 70\% = 454億3,658万円$$

約5年間でバス用品の売上げが3分の1近くまで減少した事は、現在、関係業者

にとって死活問題となっています。

これほど大きく売上が減少した主な要因については下記の通りです。

- (1) 最も大きな理由は、オオクチバスの釣り場が少なくなった事や、オオクチバスが減少し釣れなくなった事です。10～20年前は、オカッパリ(陸地)からバス釣りをしても、一日に4～5匹釣れたものですが、現在では、1匹釣る事は容易なことではありません。

大半の釣り人は、他の釣りでもそうですが、何回か釣行してほとんど釣れないと、どうしてもその釣りから離れてしまいます。

毎年実施されておりますが、2004年度の大阪フィッシングショーでの入場者アンケート(資料4)でもありますように、バス釣りをやめた理由やバス釣りに対する不満として

フィールドの減少	31.1%
近場でバスが釣れなくなった	23.2%
キャッチアンドリリース禁止	17.5%
バスが減って釣れなくなった	14.5%

が挙げられており、の「バスの釣り場が減ったり、バスが釣れなくなった」を合計すると全体の68.8%を占めています。(2003年度の合計は65%)

- (2) 2番目の売上減少要因は、7～8年前より日本でバス害魚論がおこり、地域や学校によっては、「バス釣りは良くない釣りだ」あるいは「バス釣りは密放流によって成り立っており、日常的に横行している」などの喧伝があったり、キャッチアンドリリース禁止が大きいと思います。

当会では、上記のような不法移殖(密放流)は、現在、あり得ないと確信しておりますし、又、バスフィッシングは社会的意義も数多くあり、健全なスポーツフィッシングだと思っています。

(2) キャッチアンドリリースと子供の情操教育の関係について

当会ではそのような事を発言した事はないと思いますが、恐らくバスフィッシングの有用性の中で青少年の健全育成、情操教育や生命の大切さの重要性を述べておりますので、その事と一緒に受け止められているのではないかと思います。

そうであるならば、(4)の項で「バスフィッシングの有用性と社会的意義」の中で、詳しく当会の見解を記載しておりますので御覧下さい。

(3) 在来生物の減少要因やその復元の手法等について

第一回目でも、詳しくご説明致しましたが、当会では下記のように考えております。一部の人間から「日本の在来種が減少した最大の要因はオオクチバスをはじめとする外来魚によるもの」と言われております。しかし、オオクチバスは魚食性が強い魚と思っておりますが、在来種減少の最大要因とは考えておりません。具体的には、

- (1) 開発等による環境破壊（ダム、河口堰、直立コンクリート護岸・河川改修・道路建設・森林伐採・湖底浚渫等）
- (2) 家庭雑廃水や農薬、工場廃水による水質劣化・汚濁
- (3) 在来種の産卵場所（内湖、水路、湿地、水田等）の埋立て
- (4) 漁業者による乱獲
- (5) アシ、ヨシなどの水生植物の伐採、削減
- (6) 外来魚等の影響
- (7) 意図的な水位低下など、治水事業によるもの
- (8) 長年に亘る、本来その場所に生息していなかった国内外の外来種の放流事業等による在来種の生息環境の圧迫
- (9) カワウ等による捕食の影響
- (10) 酸性雨による水質の急速な酸性化

また、下記の要因だけではなく、自然環境が刻々と変化していく中でダイオキシンや環境ホルモン、トリハロメタンなど化学物質による影響など、解明されていないものも多く、ある程度認識されているものだけでもその要因は多岐に亘っていると考えております。

当会は、世界各国の有識者が言われているように、在来種減少の最大要因は様々な要因がある中で、開発、治水、利水等の人為的に改変された外来環境こそが、最も影響を与えてきたと考えております。

霞ヶ浦、北浦では、食糧増産・漁業振興を目的に、明治の初期から外来種を導入し、現在では56種中22種（40%）が外来魚種です。

しかし、そのように100年以上前から、今日まで数多くの外来種が導入されましたが、在来種に影響を及ぼすほど大繁殖した例はほとんどありませんでした。それはもともと外部からの侵入を防御する機能が湖に備わっていて、簡単に繁殖・定着を許すことがなかったからです。安易な駆除や放流などは、人間が手を加えたものに更に手を加えるという事になりますし、人間の勝手な思惑ではなく、「豊かで恵まれた自然こそが、そこに最も適した生態系を作ってくれる」「最終判断は自然の摂理に委ねるべき」と基本的に考えております。

1925年にオオクチバスが日本で初めて移殖された芦ノ湖では、漁業権魚種認定漁場（公認釣場）として、現在でも毎年定期的にオオクチバスの放流事業を続けてお

りますが、ワカサギや在来種であるヨシノボリやエビ類は大量に繁殖しております。

芦ノ湖では大規模な開発がなかったことで、現在でも自然環境の保全、在来種・外来種の一定のバランスが維持されております。

従って、在来種の生息・増殖にとって最も重要なことは、環境負荷の低減と共に、自然環境の再生復元こそが最重要課題ではないでしょうか。

また、今回提出させて頂いた「バス問題解決に向けての（財）日本釣振興会からの提案」の中に、現実に沿った具体的な当会の行動指針を記述しておりますので御覧下さい。

(4) 釣り人には、バス釣り継続の客観的理由を提示して欲しい

「バスフィッシングの有用性と社会的意義」の別資料に掲載しておりますので、御覧下さい。